



たいしも通信

シリーズ第19回目となる今回は「前田砲台跡」についてです。国道9号線を長府から九州方面に下ると、関門橋の少し手前あたりで、右手山側の高台にこの看板が見えてきますが、詳細についてははつきりしない方も多いと思います。過去の拙稿でも歴史イベント毎にはまとめているものの、個別の地点についてはあまり詳しく触れていなかったもので、この機会に少し掘り下げてみようと思います。

◆何のための砲台？

前田砲台跡から国道をさらに南下すると、今度は左手に壇之浦古戦場跡(みもすそ川公園)があり、こちらには大砲のレプリカが設置してあります。これらは前田台場(台場・砲台陣地のこと)及び壇之浦台場とも呼ばれ、長州藩が海峡封鎖用に築造した砲台の跡地で、どちらも同様に大砲が並んでいたようです。

◆時代背景と下関戦争

前田台場は、幕末に発生した下関戦争の舞台となった場所です。その頃朝廷側は幕府に攘夷を迫っていましたが、幕府側は港の封鎖程度と考えており、長州以外の諸藩では布告を無視していましたが、強硬派の長州藩だけは関門海峡を通過する外国船への砲撃を開始したのです。

1863年6月、長州藩はアメリカの商船を砲撃。翌月にはフランスの軍艦を砲撃。さらにその後は長年友好国であったオランダの交代表が乗った船を砲撃します。アメリカは幕府に抗議し、報復のため軍艦を下関へ向かわせ、同年7月に長州藩の軍艦2隻を撃沈、もう1隻を大破させました。フランスも報復のため軍艦2隻を派遣。同じ頃に前田台場を砲撃のうえ上陸し、周囲の民家を焼き払いました。

米仏の報復攻撃を受けた長州藩は、奇兵隊結成や前田砲台の修復等を行い、体制を整えます。翌1864年、英仏蘭米の4か国は幕府に対し、海峡封鎖解除の通告を行いました。長州藩は応じず、同年9月四国連合艦隊17隻(イギリス9隻、フランス3隻、オランダ4隻、アメリカ1隻)は下関を攻撃。砲台は破壊され、長州藩は惨敗しました。同年9月、連合艦隊の旗艦艦上で講和談判が行われ、長州側からは高杉晋作が使節として交渉に臨み、賠償金300万ドルの支払いなどを条件として講和が成立しました。これが下関戦争です。

◆遺構

前田台場は、長州藩が築いた十数か所の砲台の一つで、かつて長府毛利家の御茶屋がありました。南西側の低台場と北東側の高台場の2か所に分かれ、低台場は1863年の長州藩外国船砲撃のときにはすでに存在していましたが、フランス軍の報復攻撃により破壊されます。高台場はその時点ではまだ存在しておらず、翌1864年の四国連合艦隊による攻撃に備え、低台場修復の際に急遽築造されました。

各台場は連合艦隊に破壊され、設置されていた大砲は接收。大砲の一部は現在も各国に遺され、このうち一門はパリの軍事博物館から里帰りして下関市立歴史博物館に展示されています。平成22(2010)年に「長州藩下関前田台場跡」という名称で国の史跡に指定され、世界遺産暫定一覧表にも記載されています。

▼編集後記▲▲

よくもまあこのような無茶を、という驚きと、よく賠償金程度で済んだ(彦島租借(限りなく割譲に近い)という話もあった)こと、そしてこれらの知名度・認知度の低さにも驚きです。

例によって、内容に関する責任は全て支部長にあり、特に規則等に定めてあるもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。